

第5学年 総合的な学習の時間 学習指導案

生駒市立生駒東小学校 教諭 竹田 光陽

1. 単元名 命の尊さから、人と生き物が共に生きる道を考えよう

2. 単元目標

- ・何気なくいる動物の命の尊さを感じながら、自分たちが選択する行動一つで未来に影響を与えることを理解する。 (知識・技能)
- ・身近にいる動物の存在を通して、生態系を守る必要性や保全の在り方について自分の考えを表現する。 (思考・判断・表現)
- ・自らが命ある動物の一人として自覚し、身近にある動物を、責任をもって大切に想う気持ちをもつ。(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

「蚊がいる」「ゴキブリだ」「あっレッサーパンダだ」、これらの人の言動の背景にある感情は、全く違うものがあるはずである。蚊やゴキブリなら迷わず殺してしまったことがある、犬やレッサーパンダなら可愛いし、大事にしたいという思いをもって我々は生活している。これは、子どもだけではなく、大人も同様である。しかし、「この命は奪って良い」「この命は奪ってはいけない」という捉え方は個人差があり、同時に非常に曖昧である。だからこそ、本教材を通じて、一人一人が「どういった考えのもとに命の選択をしているかについて話し合うことにより、命の尊さを捉えようとする視点をもつことができる。

また、何気なく生活している中であまり意識しなかった動物が周りにいることを意識し始めることにより、身近な動物の命の重要性について自問自答する機会が生まれる。低学年の「命の教育」で命のつながりや生きていることが素晴らしいことを学び、中学年の「福祉に関する学習」では自分や他者の命はもちろん、共同して生きていることを学んできた。このように、生物の命について系統的に学ぶことができるようカリキュラム設計がなされている本教材により学習が系統的に結びつけることができるため、児童にとって適したものであると考えられる。

(2) 児童観

本校は住宅街の中に位置した学校ではあるが、緑多く校内の真ん中に池が存在するため虫が多くやってくる。そのため、虫に慣れた児童が多く、授業中でも虫が教室に入ってくるが多々ある。低学年の「命の教育」や中学年で「福祉に関する学習」を経て、児童はこれまで「命のつながり」について、しっかり学んでいるはずである。しかし、その定着しているはずの知識と行動がリンクしていないことが気にかかる。

見た目が良くない、臭いがする虫たちを見つける度に、迷わず虫の命を奪おうとしたり、「この虫は放っておいても大丈夫」「えっあかんやろ、気持ち悪いし」等というような言動が目立つ。したがって、

知識と行動の一体化を図るためにも、「命の重要性」に気づくような必要性が児童の実態があると考えられる。

身近にいる動物の存在を意識する活動を通して、生態系の重要性や保全の在り方について自分の考えを表現しようとする姿が期待できる。こうした学習経験を通して、自らが命ある動物の一人として自覚し、身近にある動物を大切に想う気持ちをもつことを期待している。

(3) 指導観

人間にとってなじみが深いペットとしての「犬」や「猫」、また可愛らしいぬいぐるみへの感情と、一般的に嫌悪感や不快感をもたれるような虫である「ムカデ」「蜘蛛」「ミミズ」にもつ感情の比較をさせる活動をまず取り入れた。

自分が身近な動物に対して、どのような捉えをしていたのか、奪って良い命や奪ってはいけない命についての明確な境界線があったのかについて振り返らせたい。「自分と対話する時間」や「友達と話し合う中で考え方の違いを感じる場面」を取り入れる中で、自分の考え方や感じ方について揺さぶりを与えることができると考える。また、自分はこの動物が嫌いだから、この虫は害がありそうだからと考え、命を奪おうとするような言動またそれを良しとしてきた周りの雰囲気について考えるきっかけをもつことができると考える。

これらの揺さぶりを生む活動を本単元の学びの初めに取り入れることにより、今まで意識してこなかった動物の背景や歴史を知ろうとする気持ちが育つと考えている。また、1年生での「海遊館見学」「天王寺動物園見学」、2年生での「うだアニマルパーク見学」や「命の教育」、4年生での「盲導犬教育」や「セラピードッグ体験」で学んできた命の重要性が、本教材での「命の尊さから、人と生き物が共に生きる道を考えること」に繋がっていることについて気づかせていく。

本単元の後半では、生き物が数多く遊びに来る「学びの池」を観察していた低学年の児童の過去の実態についてピックアップする。今では荒れ放題になり、生き物がいるかどうかわからないくらい汚れてしまっている「学びの池」を生き物が住みやすい環境を整え、「学びの池」を自分達がしてきたように今の低学年の児童にプレゼンする活動を取り入れている。これらの活動から、「命を大切に想う気持ち」はもちろん、「自分達の行動で未来が変わるかもしれない気持ち」の育成につながると考えている。

<ESD との関連について>

・本学習で生かせる ESD の視点(見方・考え方)

責任性:目の前の小さな命への向き合い方次第で、影響を及ぼす可能性があることを認識する。

相互性:小さな命と自分が同等の「一つの大切な命であること」「互いに共存できる道があること」を理解する。

連携性:先人たちが種の保存・保護に努めてきたように、世代や地域と連携し、命のバトンをつなぐ重要性を学ぶ。

・本学習で育てたい ESD の資質・能力

批判的に考える力:失って良い命、失ってはいけない命等のように、命の大きい小さいという判断をして良いのだろうかと考える。

未来を予測して計画を立てる力:絶滅の危機に瀕している動物たちの未来を考える。

つながりを尊重する態度:今私たちの気づきを受け継いで行かなければ、人々の記憶から失われてしまう命があるかもしれない。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

相互性:自分達の何気ない行動が動物の生態系に影響を及ぼす可能性があると感じ、動物の存在の裏側にある背景を知り、責任ある行動が必要だと気づく。

・達成が期待される SDGs

目標 11:「住み続けられるまちづくりを」

目標 15:「陸の豊かさを守ろう」

4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に取り組む態度
① 何気なくいる動物の命の尊さを感じながら、自分たちが選択する行動一つで未来に影響力を与えることを理解している。	① 身近にいる動物の存在を通して、生態系を守る必要性や保全の在り方について自分の考えを表現している。	① 自らが命ある動物の一人として自覚し、身近にある動物を、責任をもって大切に想う気持ちをもっている。

5. 単元の指導計画(全13時間目)

主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
1. 「命に大きい小さいってあるのかな」 ・「奪って良い命」「奪ってはいけない命」について、考えを出し合う。 ・考えを出し合う活動を通して、自分と他者との捉え方の違いに気づく。	・身の回りにいる動物(虫)の存在から、一人一人の考えを出し合う話し合いの場を設定する。 ⇒身近な例を提示し、個人の感情によって、命の選別をしてきた現実気づかせる。	イ①
2. 「園」にいる動物調べをしよう。 ・動物園、水族館の役割や、そこにいる動物たちがどのように選ばれているのか調べる。 ・今まで行ったことのある水族館を出し合う中で、「水族館にいる動物、いない動物」が存在するのはなぜか考える。	・水族館や動物園が、「楽しむだけ」ではなく、「繁殖」「保護」という目的で運営されていることに気づかせる。	ウ①
3・4. 「琵琶湖博物館」に行ってみよう!! ・なじみ深い「水族館」や「動物園」ではなく、「博物館」に興味をもつ。	・生きている動物の展示が少ない「博物館」(「動物園や水族館のように」単に楽しむだけではない、『研究』や	ウ①

<p>・学習との関連性を考え、春の社会見学先を自分達で選択する。</p> <p>・「琵琶湖博物館」に行って館員の方にインタビューする。</p> <p>・琵琶湖の生態系バランスや水質問題が、身近に存在する生き物の住処へ連鎖的に関係すること(外来種の異常発生や悪臭,富栄養化など)を理解する。</p> <p>※「チャンネルキャットフィッシュ」による古来種存在の危機問題。</p> <p>⇒「大和川の水質汚染問題」や「奈良に存在する多く存在するため池での在来種(イシガメ等)を脅かしている問題」,「猿沢池のミシシippiaアカカミミガメ問題」,「身近な草花であるオオキンケイギク問題」と結び付けて考える。</p> <p>5. 「絶滅危惧種とレッドリスト」の存在を知ろう。</p> <p>・絶滅してしまった動物を調べる。</p> <p>・現段階で絶滅しそうな動物がいるのか調べる。</p> <p>・絶滅危惧種が身近にいる現実から,どのように保全しているのか調べる。</p> <p>・琵琶湖博物館を例に,絶滅を防ぐために,人と自然との良い関係を探していくことが必要であることを学ぶ。</p> <p>6. 今までの学年を結び付け,自分にできることを考えよう。</p> <p>・2年生の「命の教育」で学んだ人との共存を考えることを想起する。</p> <p>・4年生の「盲導犬体験」での,人の役に立ったり,癒したりする動物がいたことを</p>	<p>『保全』『標本』といった役割をもつ施設)について目を向けさせる。水族館や動物園の目的とどう違うのか考えさせる。</p> <p>・実際に琵琶湖博物館に社会見学として訪れ,インタビューをしたり,調べ学習をしたりすることを通して,人々が必死に守ってきた命がある背景に気づかせる。</p> <p>・「生態系を守る」ために「外来種のようなバランスを崩す外来種を駆除している事実」と伝えることから,児童に「全ての命は大切にしなければならない」というような理想論ではなく,命の選択に生じる「葛藤」に気づかせる。</p> <p>・「人間の活動(生活排水や外来種の持ち込み)」という共通の原因によって,身近な川や池で非常によく似た環境問題が発生していることに気づかせる。</p> <p>・絶滅危惧種やレッドリストの存在を知り,種の保存活動について理解を深める。</p> <p>・「繁殖して命を守る活動をしている意図があるんだ」という気づきを深める。</p> <p>・「今まで可愛いと思っていた動物だけではなく,命ある動物を守っていかなければならない」という認識を持つ。</p> <p>・今までの学習を系統的に関連付けて,自分の気づきを確かなものにさせる。</p>	<p>ア①</p> <p>イ① ウ①</p>
---	---	----------------------------

<p>想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近で自分達ができる保全活動から成果をあげ、「命を守った経験」を積む大切さに気づく。 <p>7. 「動物がたくさんいるうちの学校、大丈夫かな？」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・荒れ果ててしまった「学びの池」や、学校内で生き物の命が脅かされている環境を有する場所の存在に気づく。 ・脅かされている場所の生き物の今を考える。 ・身近な環境で、生き物の命が脅かされている場面がないか考える。 <p>8. 用務員さんに話を聞こう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植物のことを良く知っていて中庭の草木、花を綺麗に維持している用務員さんに話を聞く。 ・生き物であふれ、子どもたちが集まったかつての「学びの池」について用務員さんと考えを交流する。 <p>9・10. 「動物カムバック大作戦!!」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生き物にとって過ごしやすい環境を維持し続けていくために、環境を整える場所を考え、自分達ができることを考える。 ・生き物が住みやすい環境を調べ、ヘドロや泥の除去、雑草刈りなど具体的な活動を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分達にも何かできないかという考えを持たせることから、身近な「学びの池」に目を向けさせる。 ・荒れ果ててしまった「学びの池」にやってくる動物の数が少なくなっていること、同時に観察する低学年の児童がいなくなっていることに気づかせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・生き物が住みやすい環境をつくるために、身近な人や学校に協力してくれている地域の方から学ぶ必要性に気づかせる。 ・学校の中庭を綺麗にしたり、草木花を丁寧に育てたりする思いを聞く中で、自分も何ができないか模索させる。 ・小さな命(微生物)の住処である泥や雑草、ヘドロの中には「今まで気持ち悪い」と言って命を奪ってきたような小さな虫が数多く生息している事実気づかせる。池を再生するというマクロ的な視点での「生態系保全」と、「目の前の小さな命をどう扱うのか」というミクロ的な視点の衝突の矛盾を児童に問う中で今一度命の大切さについて考えさせる。 ⇒単に「すべての命は大切だ」という理想論に留まらず、「全ての命を救うことはできない現実」や、自分たちの行動がどのような影響を与えるのかを具体的に体感させ、命の選択という重い 	<p>ア①</p> <p>ア①</p> <p>イ①ウ①</p>
--	---	---------------------------------------

<p>11・12. 「学びの池をプレゼンしよう大作戦!!」</p> <p>・「命の教育」を学習した低学年(2年生)に、再び命の重要性に気づいた自分達の思いを伝えるプレゼン資料をつくる。</p> <p>13. 「人と生き物(動植物)にとって真の豊かさとは何だろうか」。</p>	<p>テーマについて深く考えさせる。</p> <p>・人と生き物の関係・共存への道, 「学びの池」にいる動物について Canva で考えをまとめ, プレゼンさせる。</p> <p>・今までの学習を振り返る中で, すべての命を守ることができない矛盾や葛藤を感じてきた。だからこそ, 真の豊かさとは何かを問う中で, 考えを共有させる。(共存していくために折り合いをつける大切なことを考えさせる)</p>	<p>イ① ア①ウ①</p> <p>イ①</p>
---	---	------------------------------

<成果と課題>

【成果】(ESDの資質・能力の育成に向けて)

本単元は, 「命の尊さ」というテーマを, 「人と生き物が共に生きる道」という持続可能な社会の実現という視点で捉え直すことにより, 児童のESDの資質・能力を多角的に育成しようと計画したものです。

複雑な問題に対するシステム思考力と批判的思考力の育成

児童は, 本単元の学習を通じて「すべての命を大切に」という理想論と, 「人間が生きていくため, 時に命を選択せざるを得ない」という現実の矛盾に直面するよう設定しました。この「命の選択」という学習課題を設定する中で, 児童は「命は絶対大切だよ」「命に大きい小さいなんて無い」等のような発言が見られた。しかし, 園の目的や外来種の問題学習を深めていく中で, 「命は大切だけれども, 駆除しなければ人間の生活が脅かされるから仕方がないかもしれない」「社長とか総理大臣とかはSPが付いている!!人間の中でも, もしかすると命に順位があるのかな」「自分が好きじゃない虫は命を奪って, 好きな生き物は命を奪いたくないからそこに差が生まれているんじゃないか」などのように児童の考えが変化していく様子が見られました。このような児童の言動や考えからわかるように, 複雑な問題に対するシステムシンキングを育むことができました。

生き物に対してもつ, 単なる「かわいそう」「気持ち悪い」といった人間による感情論や, 人間中心の価値観で命を判断する偏った見方から脱却し, 「必死に生きている生き物の存在」や, その命が持つ生態系における役割を再認識させることができたこと, 学習ワークシートの振り返りからも判断できました。

さらに, 「生活排水や外来種の持ち込み」といった人間がこれまで行ってきた行為が, 身近な環境問題の共通の原因となっていることに気づき, 問題の根本である構造を批判的に捉える視点を獲得させました。「人が利益のために持ち込んだ外来種, 何十年先の将来のことを考えていない現実があることがわかった。育てられないからといって放流したり, 増やしたりすることにより在来

種に影響が出ている」「命も大切。この勉強で「命について」とても悩まされました。」等のようなワークシートの振り返りが見られた。

これらからわかるように、児童は生命の保全の必要性について、根拠に基づいた自分の考えを表現する力を身につけることができたといえると思います。

将来を見通す力と、行動への責任感(当事者意識)の育成

本単元を学習する過程で、「このままにしていよいのだろうか」「自分たちに何かできることはないだろうか」という強い当事者意識と、未来への責任感が芽生える場面がいくつもありました。

学習前は迷いなく命を奪おうとした「蚊」や「見た目や人間にとって害があるとみなしている虫」に対して、「殺すより生きたまま返すことで、生きられる命が一つ増える」と考える児童が増えるようになり、教室での児童の姿でも「カメムシを殺さずに、外に逃がす」という具体的な行動変容が何度も見られました。

これは、将来を見通す力(自身の行動が未来の環境に与える影響)に基づき、身の回りの小さな命に対して責任をもって接するというESDの重要な資質の一つが育まれたと言えると感じています。

多様な関係性の中での協働的な問題解決能力

単元の後半に実施した身近な環境保全活動(学びの池の保全)では、児童は荒れ果てた池の現状を自分事として捉え、協働的な問題解決に取り組む兆しが見られます。「身の回りにある環境をどう変えられるか」という「学びの池」が干上がることへの懸念と、植物や小魚の命を維持していくという捉えを通じて、「生き物が住みやすい環境をつくる」という共通の目標に向かって行動化しようという動きが見られます。この活動自体は3学期に実施していくことになり、現段階では未実施となります。冬休みにどのようなことが自分達にできることを考えてくる課題に取り組む中で児童の問題解決能力が育つことが成果として挙げられます。

このような活動自体が全学年に発信されていくことを通じて、異学年連携を通じた学びの波及という点で成果として挙げられます。学校全体における「命の教育」の継続性を生み出すきっかけとなり、多様な主体との関わりの中で、より大きな課題を解決しようとする態度を育むことができました。

【課題】(今後のESD指導の深化に向けて)

自主的・主体的な行動の動機付けの変化

環境保全活動においては、「学びの池」に焦点を合わせるように学習を展開してしまった側面があるのではないかと感じています。成果として挙げたことにも関連しますが、主体的に「学びの池」に課題を見出し、自分たちに何かできないか考え行動しようとする動きが見られました。しかし、児童の柔軟な考えがあることから、「学校周辺の枯れ葉除去」等というように、「学びの池」に住む生き物だけではなく、様々な生き物を救うために有効な活動を考えることもできたかもしれません。

ESDで求められる資質は、「自らが課題を発見し、解決に向けて主体的に取り組む態度」です。3学期は、単なる作業にするのではなく、「今この活動を行うことが、自分たちの『命の選択』

とどのように結びつくのか」という学習の意図を児童一人ひとりが深く意味づけ、当事者意識に基づく内発的な動機づけを強化する必要があると感じました。活動をより自由に発案させる、あるいは地域との連携を深めるなど、真の意味での自主性を引き出すための指導の工夫が必要であったと感じています。

※「学びの池」として児童に引き出した2学期末ではありますが、児童の「そういえば、優先順位としては〇〇の方が～」等のように、児童主体で学習の方向性が決めていくことを考慮しながら3学期の学習を展開しています。

意識変容のプロセスの言語化と振り返りの強化

本単元学習を通して、児童による行動変容が芽生え始めましたが、「自分がどの知識を得て、どのような葛藤を経て、どのように考えを変え、行動に至ったか」という学びのプロセス(意識変容の軌跡)を言語化し、振り返る機会が十分ではなかったと振り返って思います。ESDにおいて、自己の価値観の変化を認識し、その変化を他者に説明できることは、学習を持続的なものにするために不可欠であると学びました。今後は、指導案の評価項目においても、学習のプロセスや思考の深まりをより重視し、個々の学びを可視化・共有化する時間を確保することが課題と考えています。

活動の持続可能性と学習の連続性の確保

本単元を単発の「命の学習」で終わらせず、ESDとして学習を持続可能なものにするためには、学習の連続性と他教科・地域との連携をより意識させていく必要があると感じました。

学びのストーリーマップを作成し、本単元の学習を展開していますが、児童は一つ一つのすべての学習が、どこにどう結びついているかは意識させるところまで至っていません。

また、身近な環境を保全する今年度の活動である「動物カムバック大作戦」を、同学年の総合的な学習の時間の核と引き継いだり、次年度以降の低学年や地域住民・団体などへと広げ、単元で得た知識や行動を、学校生活や地域社会の維持・発展に継続的に活かしていく仕組みをつくったりすることがこれから必要になってくると感じました。

これらが複合的に関連していくことにより、児童は自分たちの学びが、社会に役立っていくものであるという認識を深めることができると考えています。ESDの目標である「持続可能な社会の創り手」としての資質を育てていく視点を主体的に持ち続ける力を身に付けていくことが課題であると感じています。

R7年度「ESD 学びのストーリーマップ」

現在の学年終了時に目指す姿

自らを生態系の一員として捉え、全ての命の尊さを基盤に、人と生き物が共生する未来を創るために、責任ある行動を起こすことができる。



<単元目標>

- ・命ある存在としての自分と他者のつながりを理解し、命の尊さを実感する。
- ・生き物との共生について考え、持続可能な社会の実現に向けた行動を選択できるようになる。
- ・地域資源や人との関わりを通して、環境改善や命の保護に向けた実践力を育む。

身に付けさせたい資質・能力
(評価の観点)

批判的思考力:奪ってもよいと思う命、奪ってはいけない命のように、命の大きい小さいという判断をして良いのだろうかを考える。
未来を予測して計画を立てる力:絶滅の危機に瀕している生き物の未来を考える。
つながりを尊重する態度:今、私たちが気づきを受け継いでいかなければ、人々の記憶から失われてしまう命があるかもしれない。

行動化(学びのアウトプット)~感じたことをもとに、自分たちなりに行動してみよう~

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
総合的な学習の時間	学びの出発点~問いの芽をもつ~(揺さぶり) 「命に大きい・小さいってあるのかな」 ・身の回りにいる動物(虫)の存在から、一人一人の考えを出し話し合いの場を持つ。 ⇒個人の感情によって、命を選択している現実を知る。 「絶滅危惧種とレッドリスト」の存在を知ろう。 ・絶滅危惧種やレッドリストの存在を知り、種の保存活動について理解を深める。 ・「繁殖して命を守る活動をしている意図があるんだ」という気づきを深める。 ・「今まで可愛いと思っていた動物だけではなく、命ある動物を守っていかなければならない」という認識を持つ。 「『国』にいる動物調べをしよう」 ・動物園、水族館の役割や、そこにいる動物たちの存在理由について調べる。 ・水族館や動物園が、「楽しむだけ」ではなく、「繁殖」「保護」という目的で運営されていることに気づかせる。 「『絶滅危惧種とレッドリスト』に行きたい!!」 ⇒「インタビューをしよう」 ・生きていく動物がいない「博物館」について目を向けさせる。水族館や動物園の目的と、どう違うのか考えさせる。				探求②~身近な課題の自分事化~(学びの池) 「学びを結び付けてみよう」 ・今までの学習を系統的に関連付けて、自分の気づきを確かめるものにする。 ⇒①命の教育(2年) 【あらゆる「命」に共感し、大切に育てる心を育てよう】 ⇒5年とのつながり【命の価値づけの揺さぶりへ】 ⇒福祉体験(4年) 【自分とは違う立場の人々のことを理解し、思いやりの心を持って行動する力を育てよう】 ・身近で自分達ができる保全活動から成果をあげ、「命を守った経験」を積み大切さに気づく。 ⇒5年とのつながり【共存の視点の獲得へ】				探求①~外来種・絶滅危惧種の理解~ 「人」と生き物(動物)にとって真の豊かさとは何だろうか? 今までの学習を振り返り、すべての命を守ることができない手帳や葛藤を感じてきた。だからこそ、真の豊かさとは何かを問う中で、考えを共有させる。(共存していくために新しい問いをつけるが中心で考えさせる)			
	①知識と行動のリンクがないことを振り返る中で、知識としての再定着へ。 ②命の選択の葛藤⇒行動化へ。				①自らの変容を振り返る。 ②命の選択の葛藤を経て、豊かさを再定義する。							
教科等との関連	社会「環境を守る取組」 関連性:地域の自然や生態系保全活動(琵琶湖博物館)				総合「社会を明るくする運動(作文)」 関連性:命の尊さや自分の考えを文章で表現する活動				総合「SNSとまぐり付き合う方法」 関連性:自分や身の回りにいる人の権利や命を守るために、自分が行う行動の責任性を考える活動。【命を守る行動の一つとしての譲歩リテラシー】			
	道徳「治せない病気を治すために~山の中神楽~」【希望・勇気・生命の尊さ】 関連性:現代医学でも治せない病気を治すために、どのような思いで研究を続けているのか考える活動。				道徳「星が光った~人間の力をこえたもの~」【生命の尊さ・感謝】 関連性:美しい自然や星から、人間の力をこえた素敵なものを感じる活動。				総合「外来種が及ぼす影響を考えよう」 関連性:人の行動が社会全体にどのような影響を及ぼすのかが、外来種が生態系に及ぼしてきた背景を考える活動。			
国語科「固有種が教えてくれること」 関連性:絶滅危惧種の保護活動の存在を知ることや、自然環境を守るために自分は何ができるのか考え、発表する活動。				理科「植物の発芽と成長」「メダカの飼育」 関連性:「学びの池」への放流や環境整備活動				理科「動物のからだのつくりと働き」 関連性:身近な動物の観察や命の違いを考える活動				
国語科「子ども未来科」で何を「する」 関連性:事実と感想、意見とを区別して、説得料のある提案を考える活動。				国語科「あなたは、どう考える」 関連性:普段の生活の中から課題や題材を見つけ、意見文を書く活動。								

<育つESDの資質>

批判的思考力:感情による命の選択の矛盾に気づく。
システム思考力:外来種・環境汚染・人間の活動の因果関係を理解する。
「嫌いな虫は殺傷する、可愛い動物は守る」⇒「命の価値づけが感情に依存していること」に気づく。
・未来予想力:「このままでは外来種が消えてしまうかもしれない」ということ想像する。
「命は大事だが、駆除しないと生態系が壊れてしまう」という葛藤を理解する。

<育つESDの資質>

連携性:世代・地域から学び、環境を守る姿勢を育てる。
責任性:自分達の行動が未来の生態系に影響することを理解する。
「このままでは命が失われる」「自分達ができること何か」と考え始める。

<育つESDの資質>

協働的に問題を解決する力:仲間と協力し、環境改善に取り組む。
行動への責任感(当事者意識):「自分達の行動が未来を変える可能性をもっている」と実感できる。